聖パウロの布教活動について考える

93E027　川 本 奈 央

「パウロの存在なくしてキリスト教の発展はありえなかった。」私はこの言葉をよく耳にする。回心以前はタルソ生まれでローマ市民のユダヤ人であったため、キリスト教徒を迫害する側に立っていたパウロ。そのパウロが自らの意志でそれらを捨て、迫害される側の生涯を選んだ。パウロが生涯をかけてどのような布教活動（伝道旅行）をしたかについて考えようと思う。

まず第一に「信仰」を市民にどのようにして広げたか、ということを挙げてみよう。パウロは救いは人間の行為によって得られるものではなくて、信仰というものを通じて神から恵みとして与えられると断言している。まさにこれが「信じる者は救われる」ということであろう。この信仰を論証したのが手紙の中にある。この中で、「わたしたちは、何事も真理に逆らってはできませんが、真理のためならばできます。」（コリントⅡ13：8）という言葉がある。これは、「私たちは信仰する人のためなら救いを教えることができます。」と言い替えることができるように思える。キリストはあなたがたの内におられるから信仰を持って生きなさいとパウロは手紙で書いているのである。パウロもこの信仰を持って生きてきたからこそ、反感と迫害を受ける布教活動であっても続けられたのだろう。そしてパウロは布教活動（伝道）をする際には、いつも自分の言葉に幾人かが耳を傾けていてくれればという姿勢をとっているのだと思う。一人でも感動してくれればそこから周りの人へも同じ感動が伝わるかもしれない。パウロがこんな可能性を抱いていたかどうかは定かではないが、現に幾人かがパウロの言葉に耳を傾けたことが少しずつでも積み重なったからこそ、世界で最も大きな宗教へと発展したのだと思う。私はパウロのこの謙虚な姿勢が本当にすばらしいことだと思った。布教（伝道）は強制とか説得といったような形ではなくて、こういう形をとることが望ましいことであると思わされた。またパウロは生前のイエスに会ったことがないにもかかわらず、回心をし、信仰し、キリスト教を啓示した。信仰や救いを広めている最中、パウロに対する迫害は数多くあっただろう。体に受けた傷だけでなく心に受けた傷も多かったに違いない。しかし、信仰を持っていればどんなにつらく苦しい旅も、勇気を持ち、不安に脅えることなく耐えることができると信じていたからこそ、伝道旅行を続けられ、この伝道旅行がパウロのこの世の旅につながるものではないかと思う。さらにパウロは信仰を手紙でも伝えた。その中に「信仰を持って生きているかどうか自分を反省し、自分を吟味しなさい。」（コリントⅡ13:5）、「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。以下省略」（ガラテヤ2:16）というような信仰に関する文章が数多くある。これらが示しているように信仰することによって神の意志に沿って生きるように努めなさいということを、パウロは人々に伝えたかったのだろう。

第二にパウロの教えた愛について述べようと思う。これは私が前回のレポートでキリストの愛について述べたことから、パウロに対しても少し考えようと思ったのである。「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方

が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」（使徒言行録20:35）とあるように神と人との間で愛は何一つ要求されることなく還流するのである、と曽野綾子編著『聖パウロの世界をゆく』（講談社、1985年）に書かれており、私はこれを読んで簡素な文章であるけれども、深い意味が込められている、と思った。パウロは手紙の中でもよく「愛」という言葉を使っている。「目を覚ましていなさい。信仰に基いてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい。」（コリントⅠ16:13－14）という文章を目にした時は人間がこんな生き方をすることができたら、どんなに人生が充実するだろうかと思った。パウロのこの文章は教育のある人にもない人にも、富める人にも貧しい人にも端的で、共感でき、また自分が愛をもって生きているかどうかということを見直すのに最適な文章であると感じた。愛を与えられた人は幸福になる。同時に与えた人も満たされる。愛は一人では絶対に成り立たない。二人以上いるから救うことも助けることもできるのだと思う。またパウロは、「愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう。わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。」（コリントⅠ13:8－9）とも書いている。私も最終的に愛だけは廃れることはないと思った。キリストがアガペーという形で人々を救ったとき、このことは証明されたのではないだろうか。愛を信じるか信じないかは個人によって違う。けれどもキリストの愛を広く人々に伝えたのはこの聖パウロである。パウロは布教活動を通してキリストが人間の内におられ、愛を与えてくださると教えているのである。この愛について触れているのはコリント使徒への手紙だけではないが、広く詳しく書いているのは第一の手紙の13章ぐらいであろう。パウロはここで、愛は与えることに始まり、喜びと感謝で報われるようになっていることを能弁に語っている。神を愛し、神からも愛されることは、人間にとって最大の幸福であり、それは同時に「救い」につながる。人間同士の場合、愛が一方的になってしまうこともありえるが、神と人間の間では相互的で答えのかえってくる（私はこの答えが救いであると思う）ものであると言える。愛にも恋愛、隣人愛、兄弟・家族愛と様々な形があるが、根本的には相互を信じるから愛という火がともされるのだと思う。どんな形の愛も結局は信用につながるのではないだろうか。このように人間や神、生あるものを愛するように努めるかが、人間のテーマであると思う。パウロはこのテーマを手紙に託してどれ程多くの人々に愛を伝えたのだろう。伝道を通してどれ程の人の心を強く引き付けたのだろう。私はパウロもキリストと同じように見返りを求めて布教活動をしているのではないと感じた。なぜならパウロのような雄弁者であれば一人でもという形をとらなくとも、市民を説得することができただろうと思ったからである。

最後にパウロがその生涯をかけて伝道旅行をしたのは、私がこれまで述べてきたようにパウロ自身がキリストの愛を見出し、支えられてきたからであろう。キリストの力がわたしの内に宿るように、自分の弱さを誇ろう。わたしは弱いときにこそ強いからであると手紙で書いている部分は本当にパウロが、自分の弱さというものを全く畏れていないことを象徴している部分であった。「パウロなくしてキリスト教はありえない。」というのはまさにその通りだろうと感じた。人間は弱いからその弱さを他人に誇ったりしない。また他人に見せようとしない。信用している人の前でも自分の弱さを見せるということは、恥ずかしく、情けないことだと少なからず思っている人間がいるだろう。それをパウロは他人に誇っていた。それはキリストが自分の内に存在していることを確信し、その確信から強さが生まれているのだろう。人間は弱さに於て初めて他人と共通の地盤を見出すことができる。その弱さがあるから救いがあるのであ

ろう。パウロは数多くの人々の心に語りかけて、感動させ、共感を覚えさせ、キリスト教を広める使徒に本当にふさわしい人であると思った。